

# 生 *Seikatsu Bunkashi* 史

## 生活文化史

<史料館だより>

### 目 次

◇本庄村史の地理編・民俗編発行 .....	大国正美	2
◇トライやる・ウィークと史料館 .....	水口千里	3
◇展示品との対話（一四）		
酒 爛 器 .....	水口千里	4
◇日本最初のプロゴルファー「福井寛治」 .....	望月 浩	5
◇史料館日誌抄・資料寄贈者ご芳名 .....		8

2004. 3. 31

NO.32

トライやる・ウィークと史料館(P.3参照)  
季節展示「夏の風物詩」の展示作業を  
行った重久君(右)と古川君。  
この作業は構成から展示まで二人が力  
を合わせて行ってくれました。 ▶



神戸深江生活文化史料館

## 本庄村史の地理編・ 民俗編発行

史料館副館長 大 国 正 美

念願の『本庄村史』第一冊目の「地理・民俗編」が三月末、ようやく出版される。続いて歴史編を発行する。執筆者の急死、災害、戦災、合併、大震災など多くの障害を乗り越え、一九四二年の最初の構想から、実に六十二年ぶりの発刊である。

本庄村史は、東灘区に合併した本庄、本山、魚崎、御影、住吉の五カ町村のうち、本庄だけが唯一、地域史を編纂せよってきたことで、深江財産区管理会が提唱、青木財産区・西青木財産区で作る本庄協議会からも経費を捻出して作業を進めてきた。

### ◆一九四二年から構想、戦災、災害に阻まれ

当初の構想が持ち上がったのは、戦時中の一九四二年。本山村誌や魚崎町誌を編纂するなど実績のあった松田直一氏に依頼した。松田氏は古文書を調査し、隣接する地域の資料を精力的に筆写、八冊もの膨大な資料ノートを作成した。しかし、四四年に志半ばで病死。当時の岩谷省三村長の同意で歴史に詳しい人物が岡山に疎開中だったことから、集めた資料を岡山に送って編纂継続を要請した。ところがまもなく岡山を襲った水害のために史料は流出、戦火も激しくなり、編纂を断念した。戦後は戦災復興と復員兵士の対応などに追われ、編纂どころではなくなった。

しかし、五カ町村のうち、唯一本庄だけが地域史を持たないことへのこだわりを地域の人たちは持ち続けた。本庄村の助役を務めた太田垣正雄氏が財産区管理会会長になった際、田辺真人県立御影高

校教諭（現園田女子大学教授）に編纂を依頼。たまたま深江で江戸時代から医師を続ける深山家が建て替えられることになり、深山家の史料をまるごと財産区に寄付してもらい、村史編纂の史料とするとともに、神戸深江生活文化史料室を八一年にオープン。編纂の方は、松田氏の残したノートが幸い自宅に残されており、これを太田垣氏や田辺氏の教え子らが、内容別に整理する作業に着手した。

### ◆意外に多く残っていた史料

八三年からは私も編纂に参加し松田氏ノートの整理などをもとに資料集を三冊発刊した。当初は「災害や戦災で古文書類はほとんど散逸し松田氏の筆写史料しかない」といわれて調査をはじめたが、調べてみると、まず深江在住の大庄屋・永井家文書が現存していたことが判明。周辺の村方文書の中に、多くの本庄地域関係史料が含まれていることがわかり、史料調査は長期化した。また神戸市文書館や東灘区役所に合併前後の公文書がまとまって残っていた。

調査を引き続き優先したいという思いは強かったが、地元は通史編に強いこだわりがあり、八九年に委員長を戸田芳美神戸大教授にした通史編の編纂委員会を立ち上げた。委員は歴史・地理を神戸大を中心にしたメンバーで、民俗は史料館のメンバーとした。ところがまもなく戸田教授が急死、あとを頼んだ横田冬彦神戸大助教授もまもなく京都橋女子大に移られるなど、委員会の構成が変化、そして阪神・淡路大震災が起きた。深江は阪神高速道高架が倒壊するなど、激しい被害が出、委員の多くも被災した。このため編纂も中断を余儀なくされた。

### ◆大震災を越えて

それでも生活が落ち着いてくると、やはり「編纂したい」ということになった。ただ時間がたちすぎ、原稿出稿の足並みの乱れは大きく、早々と提出された委員と、ほかの仕事が立てこみ執筆にかかっ

てもらえない委員とに対応が分かれた。何度も筆者と話し合い、締め切りを設定しても、いざ締め切りとなると原稿が書けていないという、繰り返しが続いた。遅れが著しい分野は急遽筆者を増やした。

また原稿が提出されても、重複が多くその調整、リライトなどに多くの時間をとられた。写真の選定も時間を要した。史料館が二十一年間に集めた写真を余すところなく使用しようとしたが、ネットは著作権だった。提供者はわかっても、撮影者が誰なのか、その権利の継承者はいるのか、はっきりしないものが少なくない。また寄贈目録はあるものの、「写真」としか書いていない場合もあり、どの図柄がその写真なのか不明なものも少なくない。出版する以上、写真の権利関係を放置できない。同時にいつ、どこで撮影されたのかを特定できれば、歴史資料としての写真の付加価値は上がる。このため一点一点再調査をした。その過程では、青木文化センターの海野拓司さんに多大な協力をいただいた。

一方、原稿の分量は予定していたより大幅に膨れ、筆者と割りこむ交渉を行い、大幅に減らしたものの、それでもあわせて一三〇〇ページを超えることが現実になった。読者に読んでもらうことを考えると、分冊して妥当な厚さに抑える以外に選択肢がなくなっていた。また委員会発足から九十四年を過ぎ、これ以上発刊を遅らせることはできないと考えた。発行を優先するため、一冊目は原稿の早くそろった地理編（自然地理、人文地理）、民俗編（日常生活、漁業、祭礼、信仰、石造遺物、伝説と史跡、民具）の二本建てとした。委員会発足からあまりに時間がたちすぎた。この間、協力いただいた方のうち、財産区管理会の深山健二氏、志井正夫氏、磯辺信三氏、納多春夫氏をはじめ、鬼籍に入られた方も少なくない。ご存命のうちに発行できなかったことは悔やんでも余りある。今となってはご冥福をお祈りするとともに、速やかに二冊目の発刊を急ぎたい。

## トライやる・ウィークと史料館

— 本庄中学校の生徒を受け入れて —

史料館研究員 水口千里

兵庫県下の中学校の恒例行事である体験学習「トライやるウィーク」が平成一五年度も実施され、史料館では、本庄中学校二年生の重久卓くと古川翔太くんが、六月九日、一〇日の二日間作業を体験した。

一日目午前中は、季節展示コーナーで、「夏の風物詩」のタイトルに合わせ、資料選択、レイアウトの検討などを経て実際に展示作業をおこなった。午後は、史料館近隣の史跡をまわって、写真撮影とデータの収集など館外での調査活動を体験した。

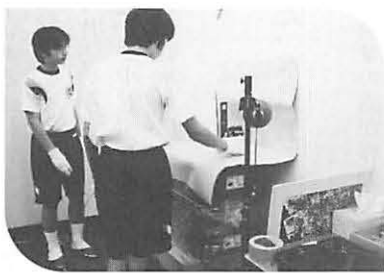
二日目は、所蔵文献の整理を手伝ったあと、収蔵民俗資料の資料カードの作成をおこなった。重久くんはカメラ、古川くんは眼鏡を選択し、デジタルカメラでの撮影、パソコンでの画像処理、写真印刷、詳細データの記入などを経て整理台帳を完成させた。

二人とも、歴史だけでなく、民俗資料そのものやデータの整理方法にも関心を抱いたようで、熱心に取り組んでくれた。



重久 卓君▲

古川翔太 君▼



資料写真の撮影をする二人▲

## 展示品との対話（二四）

## 酒 罶 器

史料館研究員 水口 千里

「なんだろう？」と思わせるかたちである。高さは一二センチほどで胴部の直径は六センチ半、金属製で注ぎ口がついていることから水差しのようなものだということはすぐわかるのだが、胴部が二つ連結されていて見慣れないかたちだ。以前、このコーナーで紹介した「吊手水」もそうだったが、民俗資料を扱っていると身近な道具でありながら、意外に名称や使い方がわからないものにぶつかる。本来なら、この資料も私たち研究員の種になっていたかもしれないが、幸いにも胴部にくっきりとした刻印があった。「新案特許 小林罶酒器 第一七五五六号」

そう、実用新案を取得した酒罶器だったのだ。

今でこそ特許といえば先端技術が主流であるが、明治時代に制定された「専売特許条例」や「実用新案法」に、最初は「町の発明家」たちのアイデア商品が殺到した。そんなアイデア商品の中には、絵に描いた餅で製造されないものも多かったし、よしんば商品化されても経費がかかりすぎて値段が高すぎ、すぐ製造中止になることもあった。特許庁電子図書館のデータベースには登録された用具の図面や説明文が残されていて、発明家たちの苦心のあとがうかがえる。

「小林罶酒器」は、明治三三年四月二五日に実用新案の出願がなされ、二ヵ月後には取得している。取得まで一年以上かかるものもあることを考えればかなりのスピードである。考案者は小林富吉という静岡県の人である。図面と対照しながら文面を読んでいくと、

構造は意外と単純だ。ふたつの胴部は下にある連結管4でつながっている。胴部1には、注ぎ口、火皿、灰受け、通風口がある。まず、注ぎ口のない胴部2に酒を入れる。もう片方の胴部1の下には炭火を入れ、そこに胴部2から連結管4を通して少しづつ酒を移す。下からの炭火で酒が温められるので、ほどよい熱さになったら、少しづつお猪口に注いで飲むという按配だ。

「うそ！」

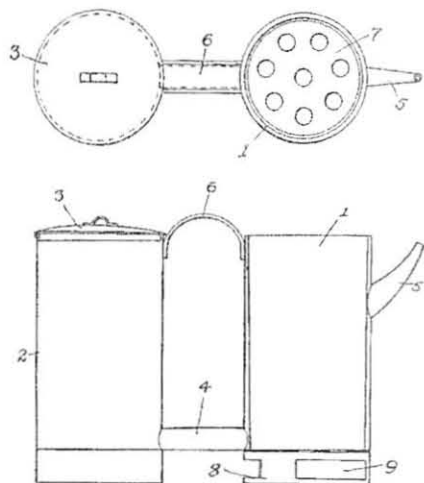
最初に図面を見て説明文を読んだだけだったら、おそらくそう思っただろう。

そんなに都合よく胴部2から胴部1へ適量の酒が移動するのか、子どもものころ勉強した理科では、連結した容器の水面は同じ高さになるのではなかったか。飲み頃の温度になったのがどうしてわかるのか。それよりこの形でこぼさず上手に注げるのか……。

疑問はつきない。しかし、「小林罶酒器」は実際に製品化され、史料館に収蔵されている。謎だ。この罶酒器がほんとうにどれほど売れたのか、なんとか知る手だてはないかと思案するこの頃である。

(1) 明治維新後、近代化が急務との観点から、特許制度整備の必要性が認識され、明治一八年（一八八五年）四月一八日「専売特許条例」が公布。明治三八年（一九〇五年）には、特許制度を補完するため実用新案法が制定。実用新案制度については、保護の対象が「物品の形状、構造又は組合せに係る考案」に限られる。

本文で紹介した特許庁電子図書館のデータは、文部科学省特定領域研究(2)「我が国の科学黎明技術期資料の体系化に関する調査・研究（略称『江戸のモノづくり』）」A 03「器物・文献資料の相關研究」「日本近代技術史の実証的研究」（三宅宏司代表）のテーマ研究「民具の近代化」の研究成果の一部である。



酒爛器—公報の図面より▲



酒爛器 ▲

八坂神社に見られる▲  
福井覚治寄贈の玉垣

神社の玉垣には多くの寄進者の名がみられる。その中には地元で活躍した人々の名も目にする事ができる。神戸市東灘区青木の青木文化センターのすぐ南にある八坂神社の玉垣の中に、「金五拾圓福井覚治」と刻まれた玉垣が見られる。福井覚治という名は、筆者が青木文化センターの海野拓司館長から、「青木に日本最初のプロゴルファー福井覚治を知っていますか？神社の玉垣にも名前がありませんよ。」と、はじめてお聞きしたその人である。ここでは、簡単であるが、福井覚治の足跡を見ていきたいと思います。

日本で最初のゴルフは六甲山上で行われている。イギリス人アーサー・ヘスケス・グルームが明治三十四年（一九〇一）に日本最初の四ホールゴルフ場を開設した。この六甲山上のゴルフ場は、アッブダウンの多いコースで、どうしてもキャディが必要となり、そこ

## 日本最初のプロゴルファー 「福井覚治」

史料館研究員 望月 浩

で活躍したのが、麓の村の子供たちであった。最初は六甲の北の唐櫃（神戸市北区）村の子供たちが中心で、のちに南麓の青木・住吉（いずれも神戸市東灘区）・篠原（同灘区）などの村々の子供たちが集められるようになった。この少年キャデイたちの中から、日本ゴルフ界の草分けとなるプロゴルファーが誕生していった。

だが、六甲山上のゴルフ場は、冬期は積雪で閉鎖された。そのため、この不便を補う目的で、六甲の会員の英国人ウイリアム・ロビンソンが、明治三十七年（一九〇四）に、当時の武庫郡魚崎町横屋に、独力で六ホールの横屋ゴルフ場を創設した。これが日本で二番目に造られたゴルフ場である。

福井覚治（幼名覚次郎）は、この横屋コースの北西隅にあった福井藤太郎という農家の次男であった。ロビンソンは、ここにコースを建設するときに、藤太郎を使って、グリーンやティーを作り、また建設後は、しばらく藤太郎の家を借りてクラブ・ハウスとしていた。

横屋ゴルフ場の会員は、初めは外国人ばかりであったが、ようやく明治四十五年頃にはじめて安部成嘉という日本人が入会した。ロンドンから帰朝して、横浜正金銀行神戸支店長となった人物である。福井がその後プロを志すに至るには、この安部との出会いが、大きな影響を与えている。

当時十二歳であった福井は、ロビンソンに可愛がられ、専属のキャディを勤めるようになり、一カ月六円の給料がもらえた。この時に打ち方のスタイルを教わっている。適当な木の株を切ってクラブを作り、ロビンソンからボールをもらって打っていた。そのうちにジーゲルトという人物の真似をして打つとジーゲルト氏に認められて、子供用のドライバーをもらい、熱心に練習を重ねた。その成果により、当時横屋の六ホールを二十五前後でまわられるようになり、

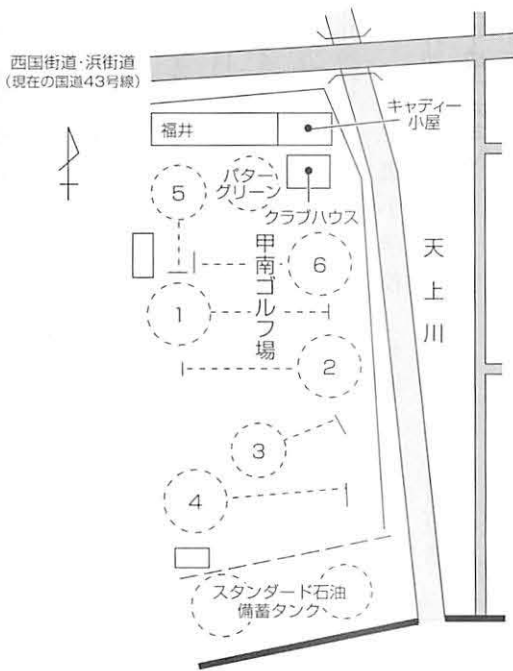
ロビンソンと対戦しても、ほとんど負けることがないくらい上達していった。そのうち子供用のドライバーでは物足りなくなり、ロビンソンに頼んで長いクラブをもらっている。その後、安部が横屋ゴルフ場に来たときに、日本人のゴルファーを見るのが初めてであることから、対戦を強く望み、結果は福井の勝ちとなった。それから安部氏にゴルフを教えてほしいと懇願され、福井にとって、最初のレッスンはじまった。しかし、説明できる言葉が見つからず、福井自身のスイングを見せるのが精一杯であった。

大正元年（一九一三）に、それまで無償で借りていた土地が買収されたために、横屋ゴルフ場は閉鎖することとなった。そのため代替地を探すことになり、ロビンソンをはじめ、安部や関西財界人の尽力で、上田南東浜の旧鳴尾競馬場跡に大正三年（一九一四）鳴尾ゴルフ場を建設した。ロビンソンと安部の設計で、福井覚治が現場監督となり、九ホールのコースを造った。この頃、ロビンソンから盛んにゴルフの指導や、クラブの修理なども勧められ、この時に福井はじめて、ゴルフに生涯を捧げる決心をしたという。

鳴尾ゴルフ場では、日本人の会員が四十人になり、多くの日本人に教えることができたため、福井はゴルフで生計を立てていくことに自信を深めることとなった。しかし、あいかわらず具体的な説明なしに、自分自身のスイングを模範として皆に見せる形のレッスンが続いた。だが、順調に見えた鳴尾ゴルフ場も土地が買収されたために、閉鎖することとなった。横屋と鳴尾の生みの親であるロビンソンも、七十歳近くの高齢であったために、鳴尾ゴルフ場で育った日本人ゴルファーに後事を託した。そこで、南郷三郎らが発起人となって、新たなゴルフコースの土地探しを行った。やがて、明石郡垂水（現在神戸市垂水区）の丘陵地帯に目をつけ、大正九年（一九二〇）九ホールの舞子カンツリー倶楽部が創立した。このときに、

発起人たちから、福井は正式にはじめてのプロ兼キャディーマスターとして採用された。これが、日本で最初のプロゴルファー誕生となったのである。

その後多くの少年キャディやゴルファーを目指す若者が、福井の門戸を叩いた。そして、日本ゴルフ界草創期のプロが数多く巣立って行くのである。大正十一年（一九二二）になると、旧横屋コースが、新しく甲南ゴルフ倶楽部として復活するようになり、福井は生家に近い青木西浜町（現在の青木二丁目）で日本で初めてのインドア・ゴルフ練習場を開いた。また、道具の製造・販売も行っていた。当時の福井のレッスンは三十分二円だったそうで、これはかなりの高い料金であった。それだけ、教えることのできるプロが珍しかったかということがわかる。



甲南ゴルフ場コース図 ▲  
(魚崎に在住されていた故井繁松氏の記憶によるもの)

その後も福井は、青木以外に大阪や京都のインドア練習場へも出張指導を行っている。また、大正十五年（一九二六）七月に実質的初めてのプロ選手権といえるトーナメントに参加し、プレイオフの末惜しくも二位となったが（翌年は三位）、同年十一月の第一回関西オープンでは、見事優勝している。しかし、この後はほとんど競技には参加せず、レッスンに専念していった。この間には、宝塚・広島・雲仙・別府や遠く満州（今の中国）の大連までコースの設計やレッスンをを行っている。

こうして、草創期の日本ゴルフ界に活躍してきた福井であるが、昭和五年（一九三〇）四月十三日に三十八歳の若さで他界した。長年狭いインドア練習場のレッスンで、マットからの埃による汚れた空気を吸いすぎたために、肺を冒されたのが原因だという。短い生涯であったが、福井の名は日本プロゴルフ協会からも日本最初のプロゴルファーとして公認され、その名は長く語り継がれている。

冒頭に挙げた八坂神社の玉垣には、大正二年（一九一三）の銘がある。この年は、福井が閉鎖された横屋コースの代わりに鳴尾コースの現場工事をしていた年で、新たなコースが無事に開設することを願っていたのかもしれない。福井寄進の玉垣は、震災や震災を乗り越えて、今も八坂神社正面の石鳥居の傍らに立っている。

最後になったが、海野拓司氏と福井義明氏には貴重なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

#### △参考文献▽

- 日本プロゴルフ協会30年史編纂委員会編『社団法人日本プロゴルフ協会30年史』（社）日本プロゴルフ協会発行 一九八七
- 撰津茂和著『撰津茂和コレクションI ゴルフ史話』（株）ベースボールマガジン社発行 一九九二

## 史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

## 平成十五年四月以降

## △平成十五年▽

6月2日 トライやるウィーク・本庄中学校二年生二名を受入れ、

／3日 二日間に渡り史料館の業務を体験してもらおう。

6月14日 神戸婦人大学（見学者 一名）

7月4日 東灘区役所新規採用職員研修（見学者 二四名）

8月28日 東灘小学校教員研修（見学者 三五名）

9月29日 魚崎小学校 三年生（見学者 一九六名）

中央小学校 三年生（見学者 九五名）

10月20日 六甲アイランド小学校 三年生（見学者 一四一名）

## △平成十六年▽

1月15日 六甲小学校 三年生（見学者 六二名）

1月20日 こうべ小学校 三年生（見学者 九四名）

1月21日 和田岬小学校 三年生（見学者 四三名）

福池小学校 三年生（見学者 八四名）

1月23日 だいち小学校 三年生（見学者 一一三名）

1月27日 東灘小学校 三年生（見学者 一六二名）

1月28日 本庄小学校 三年生（見学者 九三名）

1月29日 宮本小学校 三年生（見学者 二七名）

2月3日 御影小学校 三年生（見学者 八九名）

2月4日 灘小学校 三年生（見学者 四四名）

2月5日 本山第三小学校 三年生（見学者 一〇六名）

2月9日 御影北小学校 三年生（見学者 八四名）

2月10日 住吉小学校 三年生（見学者 一〇四名）

2月12日 福住小学校 三年生（見学者 七五名）

荒田小学校 三年生（見学者 二〇名）

2月20日 水木小学校 三年生（見学者 五〇名）

2月26日 摩耶小学校 三年生（見学者 六一名）

2月27日 西灘小学校 三年生（見学者 五二名）

## 資料寄贈者（芳名）（敬称略・二〇〇三年四月）以降

△中村茂隆▽たばこ盆一式／△吉村基▽蓄音機・SP盤レコード  
・レコードキャビネット

## 編集後記

大國副館長の巻頭原稿にもあるように、ようやく本庄村史が刊行する事となります。これまで、見学者に史料館設立の経緯を説明するとき、「村史編纂のために収集した資料を展示しています」と話してきたが、これからは、「その村史もこの通り完成しました」と、現物をお見せしながら話すことができそうです。

今年も恒例の小学校三年生の団体見学の受け入れを無事終えました。最多校記録を今年も更新、計二三校の子供達が昔のくらしを学びました。

(T・M)

『生活文化史』第32号 04・3・31

編集／道谷 卓

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

☎ 078-453-4980 (FAX兼用)